脚

吉川英治

青空文庫

目次

飢餓山河　3
飢餓山河　3
末期百態　6
江戸の花嫁　12

飢餓山河

一

「彦太承知だの」
「む、行く」
「二十日の寄合いにや、きっと、顔を出してくれや。村の者あ、おぬしが力だ。腕も弁もあるしの、学問だって、青梨村じゃ、何というても、彦太だもんのう」
大庄屋の息子と、老百姓が二、三名と、それを焚きつけてる郷士の伜とが、こっそり籾蔵から帰って行った。
彦太は、家の裏口を見張りながら、時候ちがいの冷露で、黒い枯れッ葉になった桑畑へ消えて行く人々を、見送っていた。

この子四ツじゃに
糠より軽い
軽いはずだよ
稗糧と夫婦の坊子じゃもの
坊子にゃ出ぬ乳も
運上にゃしぼる

藁で髪ゆい、縄帯しめて——
痩せた畑を、小作の子が、聞き覚えの味噌煮唄をどなって通った。
彦太は、この痩地と百姓との宿命を、呪うように、腕ぐみしていた。
日が暮れても、たね油の灯が燈せない村だった。
「いッそ、鍬を捨てて、馬口労か、木挽かになろうとしても、役銀をとられるし、油屋、酒屋も株もの、川船で稼げば川運上、雑魚を漁っても、網一つに幾らの税だ。——とても食えぬと、他領へ逃げるにも、もし捕れば打首。子を生めば胞衣金、死ねば寺金。——一体、どうしたらいい百姓だ」
と考えた。
飢えて死ぬより、強訴だ、一揆だ！
と今、囁いて行った人々の言葉だの、もがいている眼つきだのが、ひしと、心を噛む。
「どうしても、二十日には、顔を出さねばならないかな。俺が出れば、弱音はふけぬ。自分の火が、村を何十ヵ村も、火にしてしまうが——」
彦太は、自分の熱っぽい性格が怖かった。
一人の犠牲で、何十ヵ村の飢えが、救えるものならいいが、この真田伊賀守の領土では、繭糸一揆だの、千曲川の運上騒動だの、また、領主がお庭焼の陶器に凝って、莫大な費用の出所を、百姓の苛税に求めたので起った須坂の瀬戸物一揆だのと、彦太がもの心ついてからでも、数えきれぬ程、むしろ旗が騒いだが、一つも、成功した例がなかった。
人国記にもいわれてる通り、由来信州人は、智慾は旺なるも、争気に富み、郷党和せず、という欠陥があるのと、痩地の十万石で、貧乏財政をやりくりしてる藩役人は、狡策に長け、一揆の対抗には狎れきっているし、そういう方面でも、兵法の家筋だった。だから、騒いだ後は、いつも、千曲川が赤くなるほど、首謀者の首が、並べて斬られ、結局、百姓は又、何も得るところはなく、

坊子にゃ出ぬ乳も

運上にゃしぼる

と、味噌煮唄でもうたって、鬱憤をやるだけのものになってしまう。

二

近年は、その真田伊賀守の家臣で、佐久間修理という名が、百姓たちの怨嗟の的だった。修理は、号を象山といい、学者で、砲術家で、経世家だと聞えている。一頃は、目付役兼検見方として、千曲川を改修し、山には檜を植林し、低地には、林檎苗を奨励した。又、温泉の利用だの、火薬の製法だの、葡萄酒の作り方などをも、才学にまかせて試みた。それはいいが、定例の助郷のほかに、毎日、植林その他、無給仕事に、お助けと称して一家の働き手を徴発される百姓たちは、食えない上に、食えなくなった。

その佐久間象山が、やっと、藩命で京坂の方へ、派遣されたので、百姓たちは、疫病神でも追ったように、

「佐久間ばらい」

といって、祝ったくらいだったが、間もなく、その象山の献策とかで、藩の松代では、大砲だの小銃、弾薬、科学器械などを、金もないのに買いこんで、毎日、千曲川では、調練兵が、どかん、どかん、ぶっ放していた。

当然、その金は、百姓の上へ、税となってかかって来た。百姓たちは、四斤砲一発、いくらという値を知ってから、どかあん、という音を聞くと、自分たちの膏血がぶッぱなされるように、気がひけた。

武器の購入は、年々、莫大な額だった。国事御多端の秋――という論令が出たが、どう多端なのか、尊王攘夷ということばや、京都江戸あたりの騒がしいくらいな事は、耳にもしてるが、百姓たちには、その必然性が、認識できなかった。

で――飢え死にするよりは、と何度も苦い経験のある一揆を、又ぞろ、繰返すらしい不穏さが、何十カ村の同じ痩せ村にうずいていた。

彦太の家は、割に、戸数の少ない村の小庄屋だったが、遺伝的に、血の気の多い人間を代々生んでるので、萎縮してる百姓たちからは、事があると、頼られ、反対に、藩からは、睨まれていた。

「親父が亡くなって、まだ、百日も経たねえだから――」

と、彦太は、それを理由に、廻状がきても、寄合いに出なかったが、もう、退ッぴきならないものが、彼へ迫っていた。そして、顔を出せば、三代前の祖父のように、狂的に、火となって、闘うだろう事は、自分の血液が予感しているが、さて、その祖父のやった犠牲が、どれ程後の百姓を生かしたかと考えると、二の足をふまざるを得なかった。百姓は今も飢え、今も苦しい。

「はて、おらは、この生命を、そんな無駄には捨てられぬぞ」

彦太は、迷っていた。

その時、表の土間口で、

「彦よ。おるか」

「誰だあ」

「おらよ。中野宿の茂作よ」

「お。上がらっしゃい」

「うんにゃ、上がるめえ、迎えに来たのじゃ。延徳沖の酒屋の息子

な、要助どんじゃ。七年ぶりで、故郷へ帰えったで、一目会いたいといわっしゃる。来られるかの」

「ほっ、要助が、――そうけ。――長う会わんの、おらたあ、腕白友達じゃ、行くとも、すぐ行く」

もう星が出てるが、野良に出ている者は、まだ帰らなかった。彦太は、広い、真っ暗な家を、空っぽにして、出て行った。

三

幼友達の要助は、中野宿の川魚茶屋で、酒の支度をして、彼を待っていた。

彦太は、会って、驚いた。

「ほッ、おめえ、侍になったんか」

「む、ずっと京都にいたが、今度、佐久間先生のお供を兼て、松代藩へ用事があって帰郷したよ。達者かい、彦太」

「ふーム」

彦太は、うめいて、急に、対等な口がきけなくなった。この地方で、てッぱ屋と俗にいう、馬口労相手の居酒屋の伜が大小、袴、髷や言葉つきまで、見違えるようになっている。彦太は、羨望と、反抗と、それから自恥を感じた。

「よく二人で、この中野宿の道場へ、毎晩通ったもんだったけな。あの、棒振り剣術の先生は、まだやっとるか」

「おるが、この頃は、中風で剣術どころでねえでの。片手に鍬、片手に鎌で、箸を持つ手は、百姓にはねえだ。何んせい、こッぴどい運上やら、助郷やら」

「相変らず、年貢の愚痴か。村は、変らんなあ」

「佐久間修理が悪いというこった」

「象山先生は、達観の士だ。百姓たちには、あのお方の偉さがわからん。それは、時勢が分らんからだが」

「そうかの。おめえ、象山びいきになったか」

「む。……ウム。……それや拙者も、村にいた頃は、無智の仲間じゃったから、象山先生の馬面が、癪で、石を抛った事もあるが、上方へ参って、分ったな。今度、高島秋帆先生の砲式を入れるために帰国されたのじゃ」

「あんな、大砲など、莫大な金をかけて、どうするつもりだ。やくたいもねえ」

「ははは。今に、わかる」

「今に――今にといってれば、一揆が起るぞ。百姓は、もう絞る血もねえで」

「一揆」

と、要助は憫笑するように、

「おぬし、やる気か」

「おらあ、やりともねえが」

「台所喧嘩、よい程に、やめんか。――今はそんな場合じゃない。外夷と内憂と、日本は、重大な秋だ」

「日本――外夷――」

彦太の頭は、信州の何ヵ村だけの死活でいっぱいだったが、そういわれると、自分の眼界と知識が、要助とは、格段にかけ違っている気がして、

「そうかなあ」

と、屈してしまった。

英、露、仏など、各国の黒船に、日本が好餌として沿海を窺われている事実や、それを攘てという朝廷の攘夷派と、幕府の開港策とが、対立してる事や、志士、各藩の動向――水戸学の運動化――それから、支那の阿片戦争と日本の場合との比較までを――約二刻も、彦太は、要助から、たてつづけに聞かされて、頭へ詰めきれない程、充血を持って、外へ出た。

「――そうかなあ」

彼は、漠と、感動し、漠として、百姓以外の天地と生存を考え、青梨村の家へ、帰るまでに、

「自分が生きるにも、人を生かすにも、百姓では駄目だ」

と、己れへ結論を与えた。

そして、馬も鶏も、生きるにたえないような痩地を見わたして、

「要助は、台所喧嘩じゃといいよった。それも、そうかな。領主も食えんので、百姓を食う。海から、外夷が日本を食おうとするなら、大砲もなけれゃなるまい。――飢えて死ぬより、一揆なら、一揆で首をチョン斬られるより、外夷と戦って死ぬ方がましだぞ。第一、男らしい。第二には、家名も挙る」と、呟いた。

末期百態

一

「犬も飯を食うだろうに、江戸って所は、何処を曲がっても、野良犬が多いなあ。これだけの犬の食物があれや、俺の村は、一揆など起さずに済むが」

と、彦太は思った。

その野良犬と、町廻りに、何度か脅かされながら、真っ暗な問屋町を、彼は、探して歩いた。そう夜半という程でもないのに、どこ一軒、灯りの洩れている家はない。今こえて来た狭い橋の下から湧くのであろう、腐った汐の匂いがいっぱいにする闇だった。

「あ。此処ここ」

幼少の時、一度見た記憶がある。戸を卸した六間間口の艾屋の軒下に、すばらしい大釜が看板に据えてあった。釜で覚えていたのである。

彦太が、立ちどまったのは、その釜屋艾のすじ向い――弁当仕出し屋の政右衛門の店口だった。

「今晩は――」

幾度も、戸をたたいて、どなった。

「青梨村の彦太でがす。伯ッ様、信州の彦太でがすよ。開けてくんなさい。今晩はっ」

寝たにしても、このくらい叩いたら――と思っていると、程経て、

「どなた様で――」

見当違いな、土蔵の金網窓に、灯影がゆらいで、首の影が二つ、

「押し込みの御用意でもねえようだな」と、囁き合ってから、

「唯今、お開けしますから、お待ちなすって」と、答えた。

主人の弁政は、奥で、妾あがりの後妻と、寝酒を酌んでいたが、呆れたように、

「えっ、信州の甥野郎が来たと。あの、彦太のやつ、とうとう、出て来てしまったのか」

彦太は、店の若者について、もう襖の内に立っていた。丸ッこい顔に、羞恥を湛えて、そこへ、ちょこなんと畏まった。三十近くにみえるが、まだ二十四歳で、小肥りで背が短かった。百姓縞の下に、稽古着を着、紺のもんぺをはいているのである。初めは、にやにや笑っていたが、坐ると、大きな口を真面目にむすび、伯父の顔いろを、団栗のような眼でじっと見ていた。

厄介なやつだ――

そういわんばかりに、弁政は、山国から風で飛んで来てそこへ座ったような朴訥な甥を、いつまでも黙って、眺めていた。頭髪を、使いからしのハタキみたいに束ねて後ろへ下げた態や、稽古襦袢を近頃の壮士風に襟元から見せてる態や、百姓とも浪士ともつかない稚気満な恰好に、思わず吹き出したくなったが、

「――む。出て来たのか、とうとう」

おかしさを抑えて、わざと苦りきッた。

彦太は、思いつめた野望と、羞恥とを、脂肪でぶつぶつしてる顔へ、赤く燃やして、

「へい、出てめえりました。伯ッ様のお手紙にゃ、江戸へのぼる事アなんねえという御異見でしたが」

「来たはいいが、――いいがだ。――てめえ一体、田舎の家は、どうして来たのか」

「田地も、馬も、家財も、金に代えて、ここに七十両程、持って来ましただ。伯ッ様の手紙も、よく分りますだが、何せい、思い止まれねえでがす。わしは、誓って、侍になって家名を興すと肚を堅めましたもんでな。どうか伯ッ様、わしを、侍にしてくんなさい」

「馬鹿ッ」

「へい」

「おおたわけの見本だぞ、てめえは」

「……」

「いくら、山国で、ぬうと、陽あたりよく育ちやがったとはいえ、馬鹿さ加減にも、程があら。そんな世間か、江戸はな、浪人や無職者で、押し合ってるんだ。お上でも、持て余して、越中島の寄せ場へ、無宿人を集めたり、台場人足で、仕事をこさえたり、浪人徴募ってんで、ごろ浪人へ飯をくれて京都へ向けたり――」

「ま。あなた」

後妻のお村が、気の毒そうに、遮ったが、弁政は耳の蠅でも追うように首を振って、

「――いいか、そういう江戸だぞ。それでも、夜は、八刻といや、戸を卸し、御用党とか、攘夷党とか、浪士の押込みに、ふるえ上がってる不景気さだ。勿体ねえ、てめえなんざ、田舎に、じっとしてりゃ、庄屋の小旦那で、炉ばたの地酒でも食らってるか、茶のみ話に、稲の穂の勘定でもしてりゃいい身分。それを打ッちゃって、江戸へ来る。――けッ、馬鹿も底の知れねえ牛蒡野郎だ」

「伯ッ様。ちょ……ちょっと、それは違いますだ」

「何が、違う。去年から、おかしな手紙をよこすと思ったら、侍になりてえ？　……。笑わかすな、何だ、てめえの頭は、襦袢は」

「これや、国境で、藩の者に捕まると、いけねえで、変えたのでがす。わしが、村の近くで、てッぱ酒売る家の息子で、要助って者も、上方へ行って、立派な侍になったで、わしにもなれねえ事は」

「人真似かあ、てめえの発心は」

「心外でがす。田舎も、伯ッ様の考えてるようなもんではなく、一

揆か、飢え死にかの境でがす。わしら、村にいる以上、そんな家の声を聞けば、犬死と知りながらも、どんな事、仕出来さぬとも限らねえ性質でがすし、それで、百姓衆が、救えるもんならいいが、何度やっても、揚句は裏切者が出て、正直者が、獄門に梟かるだけのもんで、領主は領主、百姓は百姓、これや元々、痩せ地の上の台所喧嘩でがす。そんな、一揆のお先棒にかつがれて、河原で首をぶち斬られるよりは、侍になって、自分も生き、人も生かす工夫をしてえと思うのでがす。侍にならなけれや、その力は、持てねえと思いますで」

感情が先に走って、彦太は、いいたい事が、いえないのだった。鼻を熱くして、拳でぼろぼろ流れる涙をこすった。お村は、義理の仲だし、弁政も、江戸人の通癖で、口ではくそけなしにしてるが、肚の中では決してそうでない事を読んでるので、

「ま、ま。話は明日にして、彦さん、どてらを上げるから、脚絆だの、そんな物、脱いでおしまい、それに、お腹も減ったろうし、支度のできる間、銭湯へでも行っといでなさい。店の者をつけて上げよう。——誰か、彦さんに、町の湯を、教えておあげよ」

無理に、立たせて、彼を湯へ出してやった。

二

彦太は、弁政の店の帳場へ坐った。

故郷の家産一切をまとめて来た七十余両は、そのまま、伯父の手へ預けて、帳付けだの、若い者の手伝いをしていた。

田舎の食えないと、江戸の食えないとは、根本的に違ったものであることに、彦太は驚いた。

弁当の空き殻には、白い飯が、ろくに箸もつけず、残って来るし、料理屑は、どんどん捨てるし、これじゃ、野良犬が殖えるはずだと思った。

「どうして、これで江戸が不景気か」

彦太には、判らなかった。

問屋町辺の町人生活は、彼の眼で眺めると、松代藩の武士や、お城の生活よりは、よほど贅沢で放漫だった。この中にこそ、……と思ったが、誰も、そんな話にふれる者はなく、河岸の者や、附近の町人が集まると、黒船がどうの、尊攘党がどうのと、昂奮した。時々には、近くに、時事を諷した落首が貼られたり、瓦版の呼売りが、京都の志士の暗躍や、市井の押込み沙汰などを、触れ廻った。

「小塚ッ原で、京都の梅田雲浜、頼三樹三郎、橋本左内、その他、京都の志士が、首を並べて、斬られるそうだ」

そんな、噂もあって、彦太は、胸が躍った。そうした若い人達が、新しい社会を興すために、幕府顛覆を目企んでいることも、少し分ってきた。百姓の食えない事が、結局、藩主の所為である前に、幕府の制度がさせている事であるのも分った。

「要助がいったのは、ほんとなのだ。そして俺が、侍になって、自分も生き、人を生かすと決めた方針にも、誤りはないぞ」

彦太は、帳場の暇を見て、撃剣を習いに通った。

楓河岸に、伊能一雲の子、伊能矢柄が住んでいた。一刀流で人格者だった。

「出精すれば、上がる質だ。飽まずに、やんなさい」

代稽古が、いった。

彦太は、多少田舎で下地があったし、何でも、侍になろうという気ごみが、竹刀にも燃えてるので、伊能矢柄にも、愛された。

弁政は、女房のお村に、

「どうだ、あいつ、思いとまる風はないか」

時々、訊ねた。

「思いとまるどころですか、伊能先生の道場へ通って、この頃は、まるで侍気取り、弁政には、浪人が帳場をしてるって人がいってるくらいですよ」

「しようがねえな」と、苦笑した。

しかし、弁政は、甥のそうした熱心さが、可愛くもあった。

「何とか、してやらなければなるまい」

「御家人株でも買っておやんなさいな。侍の株は、この頃、値も下落っているし、売りたい方は、ザラだって事ですよ。何でも、二本差せさえすれば、本人も気が済むんでしょうから」

「心当りへ、頼んではあるのだが」

「割下水の御隠居などは」

「笹本様なら、顔はひろい」

「きよう、さらいの撒札が来てるんですよ。彦さん連れて、行ってみましょうか」

「あんな、がさつ者を連れて行ったら、御連中が、眉をひそめやしねえか」

「いつまで、あの人も、田舎者じゃありませんよ。私に任しておいて御覧なさい」

伯父によばれて、彦太は、畏まった。

「何か、御用ですか」

「お村と一緒に、お旗本笹本金十郎様のお屋敷へゆくのだ。稽古着など、下に着てねえで、きちんと支度をしろ。事によったら、侍の株を、御周旋して下さるかも知れねえ」

「有り難うございます。それがかなえば、わしも――」

彦太は、もう希望をつかんだように、胸をわくわくさせ、伯父夫婦へ、額をつけて、礼をいった。

「礼は、はやい。店の大事なお花客だし、先はお旗本の御隠居、どじをするなよ」

「はいっ」

彦太は、堅くなって答えた。

三

芽柳が、南割下水のゆるい流れと人通りの少ない往来に添って、並木になっていた。

「ここが本所か」

彦太は、大川からこっちへは、初めて来たのだった。お村は、

「この辺、晩になると、夜鷹が出て、彦さんなんぞ、通れない所だよ」

と、教えた。

「夜鷹って、何ですか」

「ホホホ。まだ、知らないの」

訊き返す間もなく、お村は立ちどまって、顎をしゃくった。

広い宅地と、それを囲む塀や木立や、そして厳しい錆を持った冠木門に、彦太は、

「ここか」
と、唾をのんだ。
六尺でもいそうな袖門の潜りを、お村が、気軽に入って行ったので、彦太は、はらはらした。そして、玄関の前までくると、奥の方で、三味線の水調子が聞えたので、又意外に思った。
式台の下には、粋な女下駄や、日和や、駒下駄や草履が、いっぱいに並んでいた。取次について、長い一間廊下を、書院まで通ると、
「おう、小網町の内儀か、めずらしいのう」
音声の高い——年五十がらみの面長で人品のいい老旗本が、正面の脇息からそういって、
「きょうは、社中が寄って、深いやら、新曲の評をし合うているのじゃ。ゆるりと、遊んでゆけ」
「いつも、お弁当の御註文をいただきながら、店の者まかせに、御不沙汰ばかりを」
「ま。商売の話はよせ」
「ほんに、皆様も、お揃いのところで」
「弁政の夫婦は、金溜め屋じゃという評だぞ。お前も、社中になって、ちと、芸事にでも金を撒かんと、わしが、御用党になって押込むぞよ」
「ま、殿様、御冗戯ばかりを」
すると、旗本隠居の笹本金十郎を取り巻いて、ずらっと、書院いっぱいに居並んでいた男女が一斉に、手を打って、
「ようよう、お村さん、わちきなどもす、覆面して、当世流行りの押借りと出かけやすぜ。なあ、みんな」
「繰込もうじゃござんせんか、今夜あたり」
「この同勢で——」
と、一人が、俳優の声色もどきで、
「御時勢よそに不埒な金持、軍用金の調達申しつける、嫌と申さば——てな事で、一つ、畳へ刀を突き立てるんでげすな」
「ははは、その事その事」
蓮ッ葉な女達の笑い声も交じった。
仲の町の老妓らしいのや、辰巳の羽織かと思われる仇ッぽいのや、堅々しい奥様風や、町娘や、雑多にいた。
男たちの方は、なお、階級が区々で、武士もいれば、本多髷の旦那もいる。又、銀鎖の莨入れでヤニさがっている唐桟縞のゲビた町人、町医者や、指のふしの太い職人ていの男も、げたげたと、憚りなく、笑っていた。
次の間には、緋もうせんが敷いてあって、見台と、華やかな座蒲団が二つ、細棹の三味線が一挺、その前においてある。
「旗本？　これが旗本の？」
彦太は、あっけにとられていた。
すると、その笹本金十郎が、
「お村。うしろへ連れて来たのは、誰じゃ」
「申し遅れました。うちの人の甥で、彦太という者でございますが、折入って、殿様に、お願いがあって、連れて参りました、どうぞ、よろしゅう……」と、お村のことばが終る頃、彦太は、気がついて、頭を下げた。
金十郎は、のみこんで、
「破歌の入門か」
「いえ、その方は、からきし、不器ッちょな人間でございまして——

―」

「ム、そうか。後で聞こう、後で聞こう」

気軽に、うなずくと、金十郎は、男女の中から、畳屋寅右衛門の顔を拾って、

「日本堤。一つ唄らんか」

寅右衛門は、煙管で、自分の座から三人目の男をしゃくって、

「薪梅さん、どうかお先へ」

すると、その男は又、向う側に、羽織袴でいかめしく座っている武家へ、辞儀を送って、

「出淵様。いつぞや、御家中の岡村の旦那から伺いますに、其角の句を読み入れた新作をお作くんなすって、それを藤七が節付けしたってお話じゃござんせんか。そういうものを一つ伺わせて戴きたいもんで」

「いやあ、あれはまだ、お耳に入れるほどでない」

「御謙遜でげしょう。のう、みんな」

「それは、聞きたい」

金十郎も、一緒に和して、

「出淵氏、所望じゃのう」

「唄うは苦手、身ども、どうも声が悪うて」

「どういたしまして――」

と、側にいる老妓が、

「姫路侯のお留守役は、お留守居役中での渋い喉だそうで、平清や両国あたりでは、専ら評判でござんすが。ねえ、小秀ちゃん」

「御卑怯ですよ」

自分の持ちものらしい若い妓に、出淵は、突きだされて、年がいもない顔を赤らめた。しかし、内心は得意でもあるらしく、

「然らば」

と、次の間の見台の前へ坐った。

「役不足でござんしょうが」

と、老妓が、側へ坐って、細棹を膝へのせ、糸をあわせた。

姫路侯の留守居役、出淵惣次は、くちびるを舐め、そして、眼をつぶった。成程、老妓がいったのは、世辞ではなく、多年酒席に洗練されきった、さびのある美音だった。

わがものと思えば軽し
　傘の雪
恋の重荷を
　肩にかけ

彦太は茫然として留守居役の顔を見ていた。さしも粋な破歌も、細棹の調べも、彼の耳には、一種の物音に過ぎなかった。頭の中には、田舎の痩せた田地と百姓の影が映っていた。そして松代藩の江戸の藩邸にも、留守居役はいる筈だと思った。

「――出来ましたあっ」

ぱちぱちと、人々は手を叩いた。

それから、畳屋の寅右衛門だの、誰だの、彼だのが、交わる交わる、唄自慢をし合って、日の暮れるのを知らない。

彦太には、後で聞いた知識だったが、旗本隠居の金十郎を中心にしてるこの社中は、江戸の破歌を革命して、歌沢という低徊趣味な小唄を興そうとして、ひどく凝り固まっている連中だった。職業、貴賤をとわず、ふしの工夫と、喉のしぶいところを、競い合って、仲の町や、柳橋や、辰巳へもうひろまっていることを、得意にして

いた。

灯がともると、酒宴になった。弁政の折ですませる日もあろうが、きょうは、平清から板前が出張って、贅沢な向付や熱い椀を膳にして配った。

彦太は、自分の置場をもちあつかって、

「伊能先生の道場へ行かなくっちゃなりませぬで、わしは、一足先に……」と、お村へささやいた。

お村は、帰りそびれて、酌された盃を幾つも前にならべていた。

「じゃ私は、皆さんがおひらきになった後で、殿様へ、あの事をお願いしておくから」

といった。

彦太は、もうどうでもいい気がした。門の外へ出て、芽柳の上の夕星を仰いで、ほっと、生き甦ったような心地だった。すると、樹蔭から、白壁みたいな顔に猥らな笑みをもって、にやにや、近づいてきた女が、

「ちょいと」

彦太の袂を、手に巻きつけた。

彦太は、びっくりして、

「なんだっ」

「ね……いいんでしょう」

「なにが、なにが」

「あそんで……さ」

頑固な彦太の腕が、いきなり、夜鷹の胸をつきとばした。袂が綻びて、ばくばく口をあいているのも知らずに、彼の逃げ飛んでゆく脚は、後も見なかった。

江戸の花嫁

一

雪の江戸が、朝の一瞬によごされて、騒いだ。

「井伊掃部頭が――御大老が、桜田で、水戸の浪人たちに、やられたってえぞっ」

弁当殻を集めてきた店の若い者が、昂奮して、帳場の彦太へも、小僧へも、奥へもどなった。

彦太は、憂鬱な眼をあげて、雪に埋った三月の往来をぼんやり眺めた。

弁政は、脚絆をかけて、店口で草鞋をはきながら、

「彦太、行って見ねえか」

彦太は、首を振った。

「行っといでなさいまし……」

急激に、社会はうごいて行った。首が集まれば、世間は、この状態が、どうなるか？　という話題だった。大老殺害の記憶が消えないうちに、又、坂下門に、白昼、安藤対馬守の兇変があった。次の年には、もう大和や上方は、戦だという、つきつめた噂が、江戸を暗く蔽った。

久世様お留守居屋敷、上弁七十人

浜町様、仕出し、椀だね十七人

清風亭へ、月ざらい弁当百二十人

彦太は毎日、そんな文字を帳面へなすりつけていた。無口が彼の

性格になりかかって、店の者は、彼の人間が変って来たといった。

「はやく、どうかしてやらなくちゃいけねえ。預かってる七十両を、俺が、融通でもしちまったように思ってるんじゃねえか」

「そんな事はありませんよ」

お村と弁政も、彦太が、帳場から往来ばかりじっと見ている眼に気づいて、時々、心配はしているらしかった。

帳場格子に、肱をついて、彦太はまったく往来ばかりじっと見ていた。夜こそ淋しいが、昼間は、無数の脚がそこを通った。——摺りきれた浪人の草履、女の白い踵、袴の折目正しい白足袋、裾模様、と思うと——あだな左褄、物売りの疲れた足。

それから、野良犬、野良犬、野良犬。

「地べたが流れてゆく——世の中が移ってゆく——。して俺は」

発作的に、彦太は、帳場の中から突っ立ったりする事があった。だが、この紛雑した世相のどこへ一体自分を投げこんだら正しいのか、彦太には、見当がつかない。

帳面で見ると、高値い仕出しの料理や、贅沢な重箱物が、船宿や、妾宅や、ばくち場や、およそ享楽的な集合所へ、どんどん出ている。何が不景気で、どこが戦だか、数字は、反対を示している。

「一体、世の中ア、どうなるんだ？」

口癖にいうその言葉を、地震に狎れた感能とひとしく、江戸の半面は、享楽してるようにも見える。

で、彦太も、嘆め息みたいに、時々、独りいうことがあった。

「一体、どうなるんだ！　この世間は」

二

伯父の弁政も、お村も、一緒になって、腹を立てた。

「今になって、嫌だなんていわれちゃ、私たち夫婦が、何といって、割下水の殿様へ、顔向けがなるえ。それじゃ、笹本様へ、まるで、からかい半分にお願いした事になるじゃないか」

「彦太。てめえは、余り話が長びいたので、すねたんじゃねえか。一度、ひきうけたからにゃ、黙っていても、骨身を砕くのが俺たち夫婦の性分なんだ。御家人株なんざ、売り手は腐る程があるが、先へゆく程、値は下落る様子だし、又、先の家がらや、娘があるなら娘も、出来るだけいい筋をと、殿様も、念を入れて探して下さるからこそ、長くもなったんだ。——それをてめえ、有り難えと思わず、欝いで、さアあったという段になってから、じぶくるなんざあ吾儘すぎるッてもんだぞっ。俺たち夫婦を、板ばさみにして、腹癒せする気かっ」

二人の言い条である。

彦太は、平謝りに謝った。その話は、時間と無言のうちに、解消されて、伯父夫婦も忘れ去った事だとばかり思っていた。

ところが、伯父夫婦と、割下水の笹本との間に、話は、すっかり進んでいて、急にきょう、例の道楽者の社中である船宿の薪梅で、取引をしようというのだった。その土格の売主は、小普請目見得格で小牧甚三郎という御家人、一人娘があるから、聟の形式をもって継いでくれれば、万端都合がいいという。——そして、こっちの身がらは、一切承知だし、株の値段も、最初は百二十両を希望していたのを、弁政夫婦が、こぎつけて、纏ったら、七十五両に負けようとまで、内談はできているのだった。

「うんか、嫌かは、家付の娘をてめえが見ての上だが――」
と、弁政は、ここで、りきんだ。
「自慢じゃねえが、掘出し物だ。別嬪だ。それに、歌沢の社中で、糸もいける。まあ、見てからにしろ、なあ彦太」
四囲の事情は、彦太のためらいを許さなかった。彦太は、肚をきめた。
「伯父さん、見なくっても、ようございますから、何分――」
「それがいけねえ、承知なら、機嫌よく、小牧の父娘に、会ったらいいじゃねえか」
で――彦太は、連れて行かれた。
娘は、お縫といって、二十二だという。彦太は、単純に、美人だと感じた。しかし、七十幾両の金が、美人の娘の前で、垢くさい御家人の父親と、取引される時、彼は、顔をそむけた。
帰り道に、伯父と別れて、彦太は、撃剣の師である伊能矢柄の道場へ寄った。きょうは、稽古よりも、師の矢柄に、直接、訴えてみたい気持だの疑問を、いっぱいに抱いていた。
しかし、彦太は、例の訥弁で、師の前に坐ると堅くなってしまった。矢柄は、彼が近く御家人の跡目をついで、士格になるという事をおよそ聞くと、
「それはよかった。腕では、もう立派に武士だけのものはある。大小を帯びて、大小に恥かしい貴公ではない。そう、謙遜せんでもよいわ。何か、祝おう」
と、いった。
彦太は、空しい気持で帰った。入家の日どりや支度が、伯父夫婦の手ですすめられた。彦太は、帳場から往来を見ながら爪を噛んだ。
「俺の生きる所は、娘付きの御家人の屋敷でもなし、江戸でもなし、他にあるぞ」
じっと、うごく地面を見た。緋ぢりめん、福草履、八幡黒の鼻緒、物乞いの黒い足――野良犬、野良犬。――絶えまなく、雑多な人間の脚は時を織っている。
「まちがいはない、この人間達の脚を、一度、焼ツ原から、出直させるこった」
彦太は、信念の唇を噛んだ。
「俺の体を、役立てる仕事は、千曲川のお刑置場へ坐るほかに、慥に、もっとしていい事があった。――七十両は、どうせ今に、路頭に迷う父娘へ涙金をくれたと思え」
入家の日が来た。
彦太は、聟殿だった。
派手ツぱりな伯父夫婦は、その一夜のために、神田祭りみたいな金づかいをした。割下水の笹本隠居を初め、社中の祝い物は、根太も土台も腐りかけている古い御家人屋敷へ、積みこまれた。師の伊能矢柄や、同門からも、柳樽が届いた。
「めでたい」
と、みんないった。
娘付きで、祖先からの士格を売った老御家人も、
「いよっ、めでとうござる」
と、抜け歯の間から、ほざいた。
彦太だけは、浅ましいものへそむけるように、顔を伏せていた。
そして、無駄に消費される酒だの、祝い物だのを、今でもかすかに残っている彼の百姓気質が、勿体ないものだと感じていた。しかし、

それを贈ってくれた人々の好意も、伯父夫婦の派手な散財も、気の毒とは、ちっとも思わなかった。

「どうせ今に、炎の中へ、捨てられる物だ」

そう考えていたからである。

三

酔う者は、酔いつぶれ、帰る人々は、帰った。聟である彦太と、花嫁である家付きの娘とは、当然、一室へはいった。

「悪い気持じゃないなあ」

彦太は、生れて始めて、ひっそりした深夜の灯と金屏風とに囲まれて、女性と向いあうのだった。

家付きのお縫は、灯のそばに、凍った寒椿みたいに、じっと、俯向いていた。彦太は、こんな美しい襟あしを見たことはなかった。

生涯、この家に、踏みとどまる気のない彦太は、肚をきめた最初に、売物の土格の添え物に過ぎない娘には、当然、良夫としての行為は避けようと考えていた。今夜の席にいる間も、その考えは、変らなかった。

だが、彦太は、彼女のにおいと襟あしが誘うものに、勝てなかった。

ふいと、気が変った。

「代価が払ってあるのだ。親と同意でないわけはなし、俺が去れば、又、後の男へ、土蔵付き売家で、売りに出る娘。何を、憐れがることがあるものか。――割下水の柳の下から袂をひっぱる女と思っても、不徳じゃない」

でも、彦太は、体がふるえた。

お縫は、俯向いてる上に、さらに、花嫁の重げな髪を、うつ向けた。

「……」

彦太は、彼女の手へ、手を触れた。

何もいえないのである。

すると、お縫は、とうとう顔を、畳までくッ付けてしまった。そして、蚊の泣くような声で、

「ゆ、ゆるして下さいまし、父の、苦境を救いたいばかりに、こ、こんな御縁を結びましたが、私には、さる御直参の御次男で、言いかわしたお方があるのでございます……」

「えっ？」

「ほかに、女子をお持ちなさろうとも、決して、苦情がましい事は申しませぬ故、あなた様を、あざむいた罪は、ゆるすと、仰っしゃって下さいませ。ゆるさぬと、仰っしゃられたら、私はここで、自害するよりほかございませぬ」

畳へつけた顔の下に、懐剣を持って、すすり泣くのだった。

「ウーム、成程っ」

毎日、往来の脚を見ていた彦太も、江戸が、ここまで墜ちて来ているとは、考え及ばなかった。

戸外では、野良犬の群れが、さかんに吠えだした。その中で、人間らしい物が――呼び売り屋が――精いっぱいで呶鳴りだした。

「――さあっ、大変じゃっ、見たか、聞いたか、たった今出た瓦版じゃ、瓦版じゃ。大和五条の天誅組が、下火と見えたら又しても乱が興った。平野国臣や、沢主水正、そのほか、京方の志士

浪人ばら、生野の銀山に旗挙げしたとある！　うっかりしたら江戸へも飛び火じゃぞっ！　詳しいことは読んでお知り――さあっ、瓦版じゃあ、瓦版じゃ」

彦太は、裏の戸をしずかに開けた。

草履が足にさわる。

後ではまだ、すすり泣きが聞えた。彼は、戸の外から、低声でいった。

「もう、泣かなくともいい。俺は、急に先がいそがれて来た。何年かのうちには、鉄砲かついで、西の方から、逢いに来よう、小網町の伯父貴へも、割下水へも、同じようにいっといてくれればいい。……じゃ、お寝み」

閉めると、暁闇の頭上に、星だけが白かった。彦太は、塀をのりこえた。

きゃッん！

野良犬が、彼の脚もとから、横っ跳びに走った。すると、辻から、その犬へ蹴つまずきそうに駈けてきた町役人の提灯が、

「こらっ、呼び売り屋、待てっ。――不埒な奴め、又、御禁止の瓦版を売りおるなッ。――待たんかッ、こらっ！」

犬も迅い。

呼び売り屋もなお迅い。

「ははは。ははは」

彦太は、おどけ絵画の影絵でも見るように、腹をかかえて見送っていた。

青空文庫情報

底本：「柳生月影抄　名作短編集（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社
1990（平成2）年9月11日第1刷発行
2007（平成19）年4月20日第12刷発行
入力：門田裕志
校正：川山隆
2013年1月14日作成
2013年9月28日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

脚

吉川英治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/